

【翻 訳】

ジュリオ・カミッロ・デルミニオ『劇場のアイデア』：翻訳と註釈（6）

足 達 薫

パーシパエー¹

プラトン主義者たちは、我々の〔三つの〕靈魂は、その上のほうに、火的な、あるいはエーテル的な媒介物〔vehiculo igneo, overo ethereo〕を持っていると言う。なぜならば、もしそうでなかったならば、身体という手段によらなければ事物は動かされえないがゆえに、それら〔靈魂〕は動くことができないということになるからである²。それ〔火的な、あるいはエーテル的な媒介物〕は、

1 今回、紀要編集委員の山田巖子氏のご好意により、二章分の試訳を掲載していただくことが出来た。ここに記して感謝したい。今回まで、以下の訳を発表してきた。足達薫「ジュリオ・カミッロ『劇場のアイデア』：翻訳と註釈（1）」、弘前大学人文学部編『人文社会叢（人文科学篇）』、第7号、2002年、pp.185－205（以後、足達「カミッロ（1）」と表記）；「ジュリオ・カミッロ『劇場のアイデア』：翻訳と註釈（2）」、『人文社会論叢（人文科学篇）』、第8号、2002年、pp.57－76（以後、足達「カミッロ（2）」と表記）；「ジュリオ・カミッロ『劇場のアイデア』：翻訳と註釈（3）」、『人文社会論叢（人文科学篇）』、第9号、2003年、pp. 1－22（以後、足達「カミッロ（3）」と表記）；「ジュリオ・カミッロ『劇場のアイデア』：翻訳と註釈（4）」、『人文社会論叢』、第10号、2003年、pp. 1－18（以後、足達「カミッロ（4）」と表記）。

なお、今回をもって、カミッロが構想した「記憶の劇場」の第五の階層まで登ることができた。残る第六（メルクリウスのサンダル）、第七（プロメテウス）の章、そして個々のイメージについてのより完全な分析と註釈、さらに古典的記憶術と、16世紀の視覚文化における「イメージ作りの論理」とのあいだの関係についての考察、そして基本参考文献表を含めた完全版を、近い将来発表する予定となっていることを付け加えておきたい。

2 プラトン『パイドロス』245C－246A。邦訳は、プラトン『パイドロス』藤沢令夫訳、岩波文庫、1967年、pp.55－57、「〔ソクラテスいわく〕〔C〕すなわち、この恋という狂気こそは、まさにこよなき幸いのために神々から授けられるということだ。その証明は、単なる才人には信じられないが、しかし、真の知者には信じられるであろう。そこで、まず最初に、神や人間の魂が、どのような状態を経験したり、どのような活動をしったりするかを見て、魂というものの本性について、その真実をつきとめなければならぬ。証明は次のようにして始まる。魂はすべて不死なるものである。なぜならば、常に動いてやまないものは、不死なるものであるから。しかるに、他のものを動かしながらも、また他のものによって動かされるところのものは、動くのをやめることがあり、ひいてはそのとき、生きることをやめる。したがって、ただの自己自身を動かすもののみが、自己自身を見捨てることがないから、いかなるときにもけっして動くのをやめない。それはまた、他のおよそ動かされるものにとって、動の源泉となり、始原となるなるものである。〔D〕ところで始原とは、生じるということのないものである。なぜならば、すべて生じるものは、必然的に始原から生じなければならないが、しかし始原そのものは、他の何ものからも生じはしないからである。事実、もし始原があるものから生じるとすれば、始原ではないものからものが生じるということになるだろう。そして、始原とは生じるということのないものであるとすると、他方それはまた、必然的に、滅びるということのないものである。なぜならば、始原が減びるようなことがもしあったとしたら、

次のように述べる際のダヴィデによって、天使たちの内部にあることが証明されている。「あなたはその霊〔スピリトゥス〕を天使とし、燃える火を御許に仕えさせられる」³。そして、プラトン主義者たちは、次のように付け加えている。すなわち、前述の〔三つの〕靈魂のそれぞれのために、母の子宮の中で火的な媒介物が準備されているときには、たとえ、靈魂がこの上なく肌理細かい火的な媒介物を通じて、土的な媒介物〔vehiculo terreno〕である身体と結合しようと望んだとしても、それは出来ないだろう。なぜならば、〔火的な媒介物の〕それほどまでの肌理細かさ〔sottilezza〕は、互いの本性を押さえつけあうなんらかの手段なくしては、〔土的な媒介物の〕それほどまでの肌理の粗さ〔grossezza〕と和解し得ないからである⁴。そして、〔火的な媒介物は〕諸天界を順々に、そして諸元素の球体〔spera di elemento〕を順々に降下しながら、しだいにとても肌理を粗くしていき、ついには、火と空氣の両方の本性を握り締めることになり、〔靈魂と身体の〕の融合を簡単なものとする空氣的な媒介物〔un vehiculo aereo〕を獲得するに至るのである。ウェルギリウスもこの見解を受け入れていて、第六歌の中で、彼は、罪を犯す諸靈魂〔ネフェス〕は、この身体から分離し、土の媒介物からは解き放たれるが、空氣の媒介物からは完全には解き放たれないと言っている⁵。そして、こういう理由により、靈魂は、たくさんの靈魂が住まう清めの場所〔luoghi

いやしくもすべてのものは始原から生じなければならない以上、始原そのものからは生じないだろうし、また他のものが始原から生じるといこともなくなるだろう。このようにして、自分で自分を動かすものは、動の始原であり、それは滅びることもありえないし、生じることもありえないものなのである。〔E〕もしそうでないとしたら、宇宙の全体、すべての生成は、かならずや崩壊して動きを停止し、そして二度と再び、生じてくるために最初の動きを与えてくれるものを持たないだろう。さて、自己自身によって動かされるものは不死であるということがすっかり明らかになった今、人は、この自己自身によって動かされるということこそまさに、魂の持つ本来のあり方であり、その本質を喝破したものだと言へることになり、なんのためらいも感じないだろう。なぜならば、すべて外から動かされる物体は、魂のない無生物であり、内から自己自身の力で動くものは、魂を持っている生物なのであって、この事実は、魂の本性がちょうどこのようなものであることを意味するからである。しかるに、もしこれがこのとおりのものであって、自分で自分を動かすものというのが、すなわち魂に他ならないとすれば、魂は必然的に、不生不死のものということになるだろう」（なお、訳文は一部を漢字に改めたり、句読点を改変したことを断っておきたい）。

3 日本語版聖書では『詩篇』CIV, 4.

4 プラトン『パイドン』81b. ここでは、「我々は出来る限り、自分自身の魂を肉体との交わりから浄化し、魂自身となるように努力すべきである」ことが論じられる。邦訳は、プラトン『パイドン——魂の不死について——』岩田靖夫訳、岩波文庫、1998年、p.80、「〔ソクラテスいわく〕…〔中略〕…思うに、魂が汚れたまま浄化されずに肉体から解放される場合がある。というのも、そのような魂はいつでも肉体と共にあり、肉体に仕え、これを愛し、肉体とその欲望や快楽によって魔法にかけられて、その結果、肉体的な姿をしたもの、すなわち、人が触ったり、見たり、飲んだり、食べたり、性の快楽のために用いたりするもの、それら以外のなにものをも真実であると思わなくなるからである。そして、肉眼には暗くて見えないもの、しかし知性によって思惟され、哲学によって把握されうるもの、このようなものを、この魂は憎み、恐れ、避けるように習慣付けられてきたからである」（なお、一部文末を改めたり、漢字に改変した箇所があることを断っておきたい）。

5 ウェルギリウス『アエネーイス』VI, 730 — 751 行である。Virgilio, *Eneide*, traduzione di Luca Canali, Introduzione di Ettore Paratore, Mondadori, Milano 1997, pp.234 — 236, "Igneus est ollis vigor et caelestis origo / seminibus, quantum non noxia corpora tardant / terrenique hebetant artus moribundaque membra. / Hinc metuunt cupitunque, dolent gaudetque, neque auras / dispiciunt clausae tenebris et carcere caeco. /

purgatorii] へとおもむき、空気の媒介物から解き放たれ、純粋な火へと戻り、その中に入って、聖なる場所へと上昇するのである。この高邁なる哲学は、世俗化されてしまわないように、パーシパエーの寓話によって、象徴的神学のヴェールの中に包み隠された。なぜならば、牡牛に恋した彼女は、プラトン主義者たちによれば、身体の愛へと墮落して落ち込んでしまう靈魂を意味するからである⁶。そして、それほどまでに肌理細かい事物と、それほどまでに肌理の粗い事物とのそう

Quin et supremo cum lumine vita reliquit, / non tamen omne malum miseris nec funditus omnis / corporeae excedunt pestes, penitusque necesse est / multa diu concreta modis inolescere miris. / Ergo exercentur poenis veterumque malorum supplicia expendant. Aliae panduntur inanes / suspensae ad ventos, aliis sub gurgite vasto infectum eluitur scelus aut exuritur igni; / quisque suos patimur Manis; exinde per amplum / mittimur Elysium; et pauci laeta arva tenemus, / donec longa dies, perfecto temporis orbe,. Concretam exemit labem purumque reliquit aetherium sensum atque aurai simplicis ignem. / Has omnis, ubi mille rotam volvere per annos, Lethaeum ad fluvium deus evocat agmine magno, / scilicet immemores supera ut convexa revisant / rursus et incipiant in corpora velle reverti." (邦訳は、ウェルギリウス『アエネーイス (上下)』泉井久之助訳、岩波文庫、1982年、上巻、pp.409 - 411、"[アンキセスいわく、生物は] すべて彼らの生命の、種子から見れば肉体の、災いを受けて邪魔され、地上的なその四肢と、いずれは死すべき身体とに、鈍らせられない限りでは、もともと火の性質の力を持ち、天的な起源を持つ。身体を持つ生物は、あるいは恐れまた欲し、悲しみ喜び定めなく、暗さと窓なき牢獄に、閉じこめられて上天の、光を見分けることもない。それどころか最後の時が来たりて、生命が彼らの肉体を、去っても哀れなるかな、彼らにはあらゆる悪とあらゆる肉体的な業癖が、残らず去るのでもなく、長きにわたって髓までも深く根を張る悪業は、不思議なほど強く染み込んで、抜き去りがたいのは是非もない。だからここでも靈魂たちは、罪をつぐなう報いを受け、地上で犯した悪業の、罰を支払い、それゆえに、あ靈魂たちは身体もなくして空虚な姿のままで、吊り下げられて、吹きすさぶ風にさらされ、他の靈魂たちは渦巻く広い深淵のなかに、さいなまれつつ身に染まった罪を洗われ、あるいはまた、猛火に焼かれて罪を消す。我々は誰しも自らのこの靈魂のこうむる浄化の呵責を耐えるものなり。耐えた後には我々は、エーリュシオン〔神々に愛された英雄たちの魂が住まう場所を指す。ホメロースによれば、ハーデースが支配する死者の国ではない別の場所にあるが、ウェルギリウスは冥府の一部として考えている〕の広大な場所を通じて送り出され、ごく少数の靈魂だけが、この平和な快樂の裾野に住みつき、時の輪がその回転を終えるまでの長い時間、我々の心に染み付いた汚れから去り、感覚を神のごとくに純粋に清めて、心に清澄なる天の炎を残すことが出来るまで、長いあいだここで待ち続け、ついには天へと回帰するのである。しかし、お前がここに見る、靈魂たちは、すべてを忘却して天上の蒼穹を再び眼にするために待ち、再び身体を被ることを望みだすようにさせられたということに、まちがいはない。(なおここでは、訳文を参照しながら、より率直に意味が通るように若干改変していることを断っておきたい)

6 プラトン『パイドン』81, b (前註4を見よ)。なおカミッロは『模倣論 *Trattato dell'imitatione*』では、紀元前四世紀半ばに活躍したプラトン主義者パレファトス(おそらく主著『不思議な物語』をカミッロは意図していただろう)を具体的に名指ししながら、パーシパエーを性欲の象徴と見なす解釈を否定している。その際に、ここで、カミッロが「象徴神学についての書物」を準備していたことが分かり、とても興味深いと同時に、『模倣論』と『劇場のアイデア』の関係やカミッロの劇場構想の展開を考える上でとても重要である。『模倣論』がいつ書かれたのかを厳密に特定することは不可能だが、その執筆年代のおおよその上限は推定される。この小論文は、エラスムスの『キケロ主義者への論争』(1528年に印刷出版)におけるキケロ主義批判への直接の反論として書かれているので、その直後の時期と考えるのが自然である。現在残されているテキストの真の書き出し部分は失われてしまっているが、現存する冒頭の文章は、「しかし、君、エラスムス、多くの知恵と多くの美德に恵まれた男について私はなにを語ろうか? 公刊された『キケロ主義者』なる題名の小冊子を通じて、キケロが味わうべきことすべてを、雄弁家たちからだけではなく、分別ある人たちからも、ほとんど根こそぎ奪い去ろうとしている君について? (原文は後掲書、p.166, "Ma che dirò di te, Erasmo, uomo di tanta scienza

した結合を遂げることが出来なかったので、彼女には〔ダイダロスによって〕作られた一頭の雌牛が与えられた。それは、作られた空気の身体を意味しており、それを使うことによって〔牡牛との〕融合が可能となり、彼女はミノタウロスと呼ばれる怪物を受胎し、出産するのである⁷。これについては、それにふさわしい場所で話すことにしよう⁸。さて、このパーシパエーのイメージ⁹は、劇場の第五の階層にあるそれぞれの扉の上であって、すべてのイメージを包み込むだろう。それらは、内なる人間のみならず、外側によっても覆われている人間〔quello che è coperto dallo esteriore〕にも、そしてそれゆえに、それぞれの惑星の本性に従って身体のそれぞれ個々の部分に

e di tanta virtù? che per un tuo libretto intitolato Il Ciceroniano, messo in pubblico, tutti quei che Cicerone si diletta ti vorrebbon levar del numero non pur dagli eloquenti, ma de' giudiciosi ?)」と、きわめて攻撃的な口調で語られている。このことは、論争熱がとて強い時期に書かれたことを推測させる。もしこの著作が、おそらくはエラスムスの著作が公刊された直後の時期に書かれたのだとすれば、カミッロはこの時期には、劇場の構想を、著作として発表する意図をたしかに持っていたと考えられる。ヴァスト公爵へのレクチャーおよび口述筆記についてはあまり気乗りがしなかったと伝えられるカミッロであるが、少なくともこの『模倣論』の執筆時には、キケロに端を発する古典的記憶術に、「劇場」という新たな衣装をまとわせることで、エラスムス的なキケロ批判に打撃を与えることができると信じていたのは確かだろう。Giulio Camillo, *Trattato dell'imitatione*, in Giulio Camillo Delminio, *L'idea del teatro e altri scritti di retorica*, Torino 1990, pp.174 – 5, "...seguitando i Platonici, io dicessi colui disceso dalle sfere, o dall'immobile cielo per le sfere, e vestito delle terrene membra, o d'umanita, mostrarsi al mondo; o, se la materia lo comportasse, facessi alcun gentile accennamento per la via della mistica teologia alla favola di Pasife congiunta col Tauro, che — si come nel libro della simbolica filosofia, dove mi darò fatica di aprir con sensi mistici non pur le dottissime favole de' poeti, ma conseguentemente le immagini che adornino i lochi del mio Teatro — dimostrero il congiungimento di Pasife col Tauro non significar isfrenata libidine, come crede e scrive Palefato, ma il discender dell'anima nel corpo." (「かつて私がプラトン主義者たちを踏襲しながら述べたように、それ〔靈魂〕は諸天球から、あるいは不動の天から諸天球を通過して下降し、地上の四肢ないし人間性を身にまとい、世界に現れる。あるいは、その説明が必要な場合には、私は、神秘的神学を利用しながら、牡牛と結合したパーシパエーの寓話を軽く強調しておいた。それは——ちょうど、象徴神学についての書物のなかで述べられるだろう。そこで私は、詩人たちのこの上なく博識な諸寓話だけではなく、その結果として、私の〈劇場〉のいろんな場所を飾るべき諸イメージを、神秘的な意味を用いて解明するだろう——、パーシパエーの牡牛との結合は、パレファトスが信じこみ、そして書いているような、制御を失った性欲をではなく、身体の中への靈魂の下降を意味するというを示すだろう)」

⁷ 興味深いのは、ルキアノスが、パーシパエーを天文学者とする解釈を記していることである。これはプラトンおよびカミッロの解釈とはかなり趣を異にするものであり、別の神話解釈学的伝統の存在を示唆している。後の註32で指摘したように、ルキアノスは、この論文で、エンデュミオンをもまた、「月を発見した」天文学者と見なす解釈を紹介しており、パーシパエーについての解釈もこれによく似ている。ルキアノスは、パーシパエーについては、このように論じている。「疑いの余地なく、パーシパエーもまた、星座たちのあいだに現れる牡牛座について、そして天文学それ自体について、ダイダロスから聞き及んでいたものであり、その教説に恋をしたのです。そのことから、人々は、ダイダロスが彼女を牡牛の妻にしたという考え方を引き出したのです」(Lucian, *Astrology*, 17, in *Lucian with an English Translation by A. M. Harmon, in Eight Volumes*, vol.V, The Loeb Classical Library 302, London-Cambridge (Mass.), 1972, p.358.)

⁸ ミノタウロスのイメージは、メルクリウスのサンダル階層の金星の扉に描かれる。

⁹ このパーシパエーの逸話を視覚化した作例のうち、カミッロが見ることが可能だったと思われる代表的なものとしては、以下が挙げられよう。バルダッサレー・ペルッツィに帰属される《パーシパエーのために牛を作るダイダロス》1521～23年頃、フレスコ（後世の加筆が激しい）、ローマ、ヴィッラ・マダーマ (Christoph

も属している諸事物と言葉を内包する書物をともなうことが望ましい。それぞれ個性的に分かれたものであり、またそれを支配する惑星の本性に従属するそれら身体の部分、最後のイメージ、つまり、ただ一頭のみ、の牡牛のもとに常にあるだろう¹⁰。

《月》

月のパーシパエーのもとには、六つのイメージがあるだろう。

蟹座を通じて降りてくる一人の娘、これは、天から降りてくる靈魂、その身体の中への入り込み、誕生前の身体の中でのその生活、その誕生、そしてそれらに属する諸事物を意味する。

メルクリウスから衣服を差し出されるディアナがあり、これは靈魂の、あるいは身体の形の变化を意味する。

アウゲイアースの家畜小屋は、身体の汚さ、およびそこから排泄される事物を意味する。

雲の間のユーノーは、人を隠すこと〔*ascondimento di persona*〕を意味する。

山の上にいるプロメテウス、これは、この山に結び付けられた鎖の輪を指にはめている。そして、古代の諸寓話の中に、プロメテウスが行った火の泥棒のために、ユピテルは彼をコーカサス山に鎖でしばりつけ、あるいは束縛させ、後になってからは慈悲の心に突き動かされて彼を解放したと記されていることを、知らなければならない。そして、彼はそのような恩恵に感謝した彼は、その鎖の輪とコーカサス山の小さな石を手に取り、それぞれをくっつけて一本の指にはめた。このことから、いつの頃からか、指輪の発明と、〈指にはめられる〉という格言とが生まれたのだと、彼らは述べている¹¹。このイメージは、感謝、義務、そして弱さ、およびそれらに似た事物を保持するだろうし、また、他のどの惑星にもまして、毎日、太陽から明らかな恩恵を受けているがゆえに、月

Luitpold Frommel, *Baldassare Peruzzi als Maler und Zeichner*, 2 vol., Anton Schroll, Wien-München 1967 – 8, vol. 1, Abb.58a, 1) ; ジュリオ・ロマーノに基づき、その助手 (リナルド?) によって描かれたフレスコ画《ダイダロスによって作られた牛のなかに入るパーシパエー》(1528 年頃) (Frederick Hartt, *Giulio Romano*, Hacker Art Books, New York 1981, fig.264) ; ベルナルド・ペレンティーノ《ミノスとダイダロス》1531 年以前、ケンブリッジ、フィッツウィリアム美術館 (Jane Davidson Reid, with the Assistance of Chris Rohmann, *The Oxford Guide to Classical Mythology in the Arts, 1300 – 1990s*, 2 vol., New York-Oxford 1993, vol. 2, p.843)。さらに、ウェルギリウスの詩が視覚表現に与えた影響については、以下の基本文献を参照のこと。Marcello Fagiolo (a cura di), *Virgilio nell'arte e nella cultura europea. Comitato Nazionale per le Celebrazioni del Bimillenario Virgiliano*, De Luca Editore, Roma 1981.

¹⁰ 「ただ一頭のみ、の牡牛」になるのは、パーシパエーが恋した牡牛がまさしく身体を表象するからである。

¹¹ これは、プロメテウスに関連する逸話としてはとても珍しい部類に属するといわなければならない。以下を参照せよ。Ateneo, *Deipnosophistae*, XV, 674. 興味深いことに、彫刻家のベンヴェヌート・チェッリーニが、その『自伝』のなかで、このような指輪の格言について述べている。Benvenuto Cellini, *La vita*, a cura di Carlo Cordie, Milano-Napoli, Libro I, 31, "Accade in questo tempo che in certi vasi, i quali erano urnette antiche piene di cenere si trovò certe anella di ferro commessi d'oro insin dagli antichi, ed in esse anella era legato un nicchiolino in ciascuno. Ricercando quei dotti, dissono che queste anella le portavano coloro che avevano caro di star saldi col pensiero in qualche stravagante accidente avvenuto loro così in bene come in male." (「このころ〔ベストの流行が終息を迎えた 1524 年のローマで〕、灰がつまった古代の骨壺だったいくつ

に属する。

ただ一頭の牡牛、これは、(他のすべてのパーシパエー〔の扉〕においてと同様に)人間の身体
のなんらかの部分を含むはずである。そして、それらの中でも、いくつかは特別な部分であり、い
くつかは通常の部分である。特別な部分と呼ぶ理由は、なぜならば、占星術師たちによれば、頭部
すべては黄道十二宮の一つである牡牛座へと帰属されるからであり、それゆえ、頭部はすべて、牡牛
座が住まう惑星である火星のパーシパエーのところにある牡牛のもとにあるのは当然である¹²。し
かし、我々は、この頭部の中から、髪の毛、髭、また身体すべての皮、そして同じく脳髓を除く
ことにしよう。そして、我々はそれらは、それらの湿気〔humidità〕ゆえに、あるいは湿気に惹き
つけられるそれらの性質ゆえに、通常の部分として胸と乳房を有する月の中の特別な部分へと帰属
することにしよう。なぜならば、胸全体が、占星術師たちによれば、月の家である蟹座のものだ
からである。

《水星》

水星のパーシパエーのもとには、五つのイメージがある。

黄金の羊毛、これは、人間の身体の高さと軽さ、および、その粗雑さ、脆さ、そして堅さを含意する。
諸原子は、人間たちの中にある、それぞれ同じくらいずつの、分断された量を意味するだろう¹³。

ピラミッドは、人間たちの中にある、大きい、小さい、背が低いといった、連続した量を意味す
るだろう。

雲に取り囲まれたユーノーは、模倣者および欺瞞者〔dissimulatore〕、狡猾で欺瞞的な本性〔を
意味する〕。

一つの車輪に縛り付けられたイクシオンは、ルクレティウスの意見によれば、死すべき者への治
療を意味する¹⁴。そして、このイメージには、取り引きを行い、努力し、産業を行う本性が与えら

かの壺のなかに、古代人たちによって金の象嵌細工を施された鉄の指輪が見つかったが、それらの指輪にはそ
れぞれ一つの貝が組み込まれていた。博識な人たちに尋ねてみると、吉凶いずれにおいても、なにか不思議なこ
とが彼らに生じたとしても、心を乱さず落ち着いていられるように願って、彼らはそれらを身に着けたのだと
言っていた。プロメテウスの図像については、以下の基本研究を参照のこと。Reinhard Steiner, *Prometheus. Ikonologosche und anthropologische Aspekte der bildenden Kunst*, Boer, München 1991; Olga Raggio, "The Myth of Prometheus. Its Survival and Metamorphoses up to the Eighteenth Century", in *The Journal of the Coutauld and Warburg Institutes*, XXI, 1958, pp.44 – 62.

¹² 身体と各星座の照応関係については、たとえば、有名な、ランブル兄弟の《ベリー公のためのいとも豪華なる時祷書》(1413～1416年、羊皮紙にテンペラ、シャンティ、コンデ美術館)、第14紙葉裏に描かれた、男女の身体と星座の対応を示す挿絵を参照のこと。

¹³ やや意味がわかりにくいだが、続くピラミッドの意味についての記述と比べてみると、「原子は、たとえば、指という単位や、腕という単位は、人間の身体の中でそれぞれ分割して計測しうる量を象徴する」という意味だと解釈される。

¹⁴ 現在知られる限りでは、ルクレティウスはイクシオンについて言及していない (Bolzoni, in *ed.cit.*, p.200, nota 8)。

れるだろう。

ただ一頭の牡牛。これは、その特殊な部分としては、言葉や、それぞれ明確に章立てて配列された話法のような、それに属する諸部分およびその結果をとまなう舌を持つだろう。これは驚嘆すべき事柄なので、それゆえ、その一冊の書物の中で切りとりによる分割を通じて〔per li tagli〕見出されるだろう¹⁵。通常の部分は二つのやり方〔due maniere〕によることになるだろう。なぜなら、水星は、ふたご座とおとめ座の双方に二つの住まいを持つからである。そして、ふたご座の部分としては両肩を、おとめ座の部分としては腕と手をもつだろう。

《金星》

金星のパーシパエーのもとには、七つのイメージがあるだろう。

ケルベロスは、飢え、渇き、そして眠気を意味するだろう。

アウゲイアースの家畜小屋を清めるヘラクレスは、身体の汚れなさを含意するだろう。

ナルキッソスは、美〔bellezza〕、愛らしさ〔vaghezza〕、可愛らしさ〔leggiadria〕、愛〔amor〕、そして、ディゼーニョ〔disegno〕¹⁶、愛すること、欲望、希望などを含意し、二つの鎖を持つだろう¹⁷。

キヅタが絡みつく棍棒を手を持つバックス、彼は、戦いではなく、楽しい時間を過ごすことを望むことを意味するだろう。そして、それゆえに、これは、怠惰および靈魂の平穏さに属する一冊の書物を持ち、陽気で愉快的な本性、楽しい時間を過ごす本性を含意するだろう。

ミノタウロス。これは、詩人たちによれば、牡牛と交わったパーシパエーの落とし児である。そして、ここで注意すべきなのは、秘儀を持たないわけではない象徴神学は¹⁸、ミノタウロスだけではなくて、ケンタウロスたちやサテュロスたち、ファウヌスたち、そしてそれに類する、臍までは人間の姿を、臍から下は獣の姿をしている者たちをも導き入れたということである。なぜならば、

15 書物と「切りとりによる分割」については、足達「カミッロ（2）」、p.75、註8を見よ。

16 カミッロはこの人間の身体の「ディゼーニョ」を新プラトン主義的な形而上学の中に位置づけている。これは、いわゆるマニエリスムの美術論者ヴァザーリやフェデリコ・ツツカリらによる「ディゼーニョの権威付け」に先駆ける事例の一つと考えられるかもしれない。さらに、ナルキッソスという絵画の発明者の一人に挙げられることもある人物の図像が示す意味のひとつに含めている点もきわめて興味深い。このことについては、足達「カミッロ（3）」、p.17 および註33も参照のこと。

17 この「二つの鎖」の意味はあまり明確ではないが、ボルゾーニの推察によれば（Bolzoni, in *ed.cit.*, pp.200 – 1, nota 9）、ナルキッソスのイメージのもとに配列されて記憶されるべき物質が、それらによって二つに区分されることを意図しているかもしれない。後述される「火星の指輪」はそれを暗示しているかもしれない。そこでは、物質を究極的に分類することが、「指輪〔anelli〕」のイメージによって示されているのである。

18 カミッロがいう「象徴的神学 *teologia simbolica*」とは、いうまでもなく、当時の詩の形や象徴的な図像の形による「寓話 *favole*」を媒介にして、その奥義を俗世間に明示すると同時に隠蔽するという意味である。これは、同時代のエンブレム論や、神話解釈学、さらにヒエログリフ研究に密接に関わっている。このことについては、足達「カミッロ（1）」を参照のこと。

19 足達「カミッロ（2）」、pp.63 – 4を見よ。

悪徳に満ち、神聖なる光（それについては前述した）¹⁹を浴びていない人間は、単に人間の形を有しているにすぎず、残りの部分は獣に比較されるべきだからである。プラトンは、『ティマイオス』の中で、我々の中の怒りに駆られやすい部分は、胸の中にあると考えられるべきであること、そして、肉欲に駆られやすい部分は隔膜〔diaphragma〕と呼ばれる軟骨の下にあること、そしてその下にはすべての感情があり、これ〔隔膜〕はまるで我々を我々から分割しているようなものである、と書いている。そして、我々は、この、より下のほうにある部分を獣と共有しているので、それに満足してしまうと、我々は獣になってしまう²⁰。このように、古代人たちが、下半身が獣に変えられてしまった人間を作り出したことにも、正当な理由があったのである。したがって、このイメージに、我々は、彼自身の告白によれば、ソクラテスの本性がまさしくそうであったような、悪徳のほうへと傾きながら、なおかつそれを実行しない本性を与えよう。そして、私がこう述べるのは、実行された悪徳についてはメルクリウスのサンダルのところであられるだろうからである。

岩の下のタンタロス²¹は、臆病で、優柔不断で、猜疑心に富み、人を驚嘆させる本性を含意するだろう。

一頭の牡牛は、特別な部分として、鼻および匂いに関連する美德を有するだろう。なぜならば、金星もまたやはり様々な匂いを有しているからである。そして〔牡牛は〕、両ほほ、唇、口も、これらの美しさゆえに有するだろう。通常の部分としては、牡牛座のためには、首、喉、喉仏、そして食ることを、他方、天秤座のためには、腰から臀部にかけての背面を有するだろう。

20 プラトン『ティマイオス』70a-b.

21 カミッロはここで、いくつかの神話の構成要素を一つにまとめている。岩に結び付けられる神話の登場人物は、通常はシーシュポスである。シーシュポスは重い大きな石を押して坂を上るが、丸い石は一度頂上に到達すると、すぐに下に転落する。他方、タンタロスは、満ち満ちた湖の水を飲もうとし、また、彼のすぐ近くの木に生えた果物を食べようとするが、それを果たせない。以下を参照せよ。オウィディウス『変身物語』IX、459 – 460、「ここは、〈罪びとの家〉と呼ばれる場所だ。巨人ティテュオスが、九町歩にもわたって身を横たえながら、臓物を禿鷹に食い裂かれている。タンタロスは、水をとらえることもできないし、頭上の果樹に手をとどかせることもできない。シーシュポスは、絶えず転げ落ちようとする岩を、追いかけたり、押し上げたりしている。イクシオンは、車輪にくくりつけられて回転し、自分を追いかけながら、同時に自分から逃げてもいる」（邦訳、『変身物語』中村義也訳、岩波文庫、2000年、上巻、pp.159 – 160）；ホメロース『オデュッセウス』XI、582 – 592、「耐え難い責め苦を受けつつ、水中に佇むタンタロスの姿も見た。水は顎のあたりに近づき、咽喉が渇いて飲まんと焦るが、水を捕らえて飲むことも出来ない。必死に飲もうとして老人が身をかがめるたび、水は吸い込まれたように消え、足下には黒い土が現れる――神の霊がことごとく干し涸らしてしまわれるのである。また、樹葉茂り高く聳え立つ、さまざまな果樹が頭上から果実を垂らしている――梨に石榴の樹、その実も艶やかな林檎の樹、甘いイチジクの樹や繁り栄えるオリーブの樹。だが老人が手を差し伸べてその実を取ろうとするたびに、風が小暗い雲間めがけてそれを吹き飛ばしてしまう。また巨大な岩を両手で押し上げつつ、無残な責苦にあっているシーシュポスの姿も見えた。岩に手をかけ足を踏ん張って、岩を小山の頂上めがけて押し上げてゆく、しかしようやくにして頭上を越えんとするとき、重みが岩を押し戻し、無常の岩は再び平地へ転げ落ちる。彼は力をふりしぼって再び岩を押すが、その全身から汗が流れ落ち、頭の辺りから砂埃が舞い上がる」（邦訳は、『オデュッセイア』松平千秋訳、岩波文庫、1998年、pp.304 – 5）。さらに、ボルゾーニ（Bolzoni, in *ed.cit.*, p.201, nota 12）によれば、タンタロスと石の結びつきは、パウサニアスの記述によって示唆された可能性がある（Pausanias, *Descriptio*

《太陽》

太陽のパーシパエーのもとには、五つのイメージがあるだろう。

ヘラクレスに殺されたゲーリュオーンは、人間の年齢を意味するだろう。

ライオンをともなう雄鶏は、優秀性、優位性、尊厳、権威、名誉ある事柄における人間による支配を意味するだろう。

〔三人の〕パルカたちは、人間があらゆる事物の原因であることを意味するだろう。

アルゴスによって見張られる牝牛は、人間の肉体の色〔という意味〕を持つだろう。

雲の間にいるユーノーを射抜くアポロンは、人間の明示、および光のあたる場所におもむくことを意味するだろう。

一頭の牡牛は、特殊な部分として、見惚れることや見ることのような、それらの操作をともなう両眼を持つだろう。そして、通常の部分としては、背中と脇^{わき}を持つだろう。なぜなら、それらは太陽の家である獅子座のものだからである。

《火星》

火星のパーシパエーのもとには、六つのイメージがあるだろう。

雲によって作られたユーノーを抱きしめようとするイクシオンがあるのは、古代の諸寓話のなかで、次のように読むことが出来るからである。すなわち、イクシオンは、ユピテルに対する敬意をまったく持たないほど、とても自惚れた本性を持ち、とても横柄で、とても傲慢だったので、ユーノーに横恋慕したばかりか、抱きしめることまで要求したのである。これによって侮辱された彼女は、雲によってユーノーの姿を作って彼をからかった。イクシオンはそれとしとねをとみにし、そしてその結合によって、ケンタウロスたちが生まれた。したがって、このイメージは、その下に隠された一冊の書物の中に、二つの鎖を持つだろう。一つはイクシオンの自惚れに、そしてもう一つはユーノーの侮辱に属するものである。最初のものは、その輪として、尊大な、横柄な、威張り、自惚れ、傲慢な、そしてこれらに類する本性を持つだろう。そしてもう一方は、その輪として、侮蔑的な、悪ふざけを好む、そして嘲りの本性を持つだろう²²。

戦う二匹の蛇は、争いあう本性を意味するだろう〔*natura contentiosa*〕。

天に向かって髪の毛を引っ張られている一人の娘は、強い、活力に満ちた、そして嘘偽りのない本性を含意するだろう。

ドラゴンの上に乗るマルスは、有害な本性を意味するだろう。

頭を持たない、すなわち知性の寝台である脳髄を持たない一人の人間。このイメージを通じて、

Graeciae, X, 31, 12)。パウサニアスによれば、画家ポリュグノートスは、責め苦を与えられるタンタロスの絵を描いたが、その姿は、渇きと飢えに責めさいなまれたうえに、雌狼に脅かされていたという。

²²「鎖」と「指輪」の意味については、上註 11 で引用した、ベンヴェヌート・チェッリーニによる記述をも参照されたい。

我々には、狂乱の、あるいは発狂する本性という意味が与えられるだろう。

一頭の牡牛。これは、特殊な部分は持たないが、通常の部分としては、山羊座のためには頭部を持ち、さそり座のためには性器の諸部分およびその諸作用を持つだろう。

《木星》

木星のパーシパエーのもとには、六つのイメージがあるだろう。

ヘラクレスに殺されたライオン。この寓話を説明するためには、聖書のあの箇所を理解する必要がある。「イスラエルよ、私に聞き従え。あなたの中に異国の神があつてはならない。あなたは異教の神にひれ伏してはならない」²³。これは、我々に、我々が二つのもっとも重い罪を犯しようということを理解させる。一つは真実にして唯一である神を崇拝しないこと、もう一つは、古代の無知な人たちよりももっとはげしく偶像崇拝を実践することである。なぜならば、彼らは、我々ならば我々の中に作る神を、彼らの外に置いて崇拝したからである。たとえば、僧院で神職にあたった頭領たちの多くは、僧院の中に、彼らの禁欲と純潔の偶像を作った。そして、彼らはそれを崇拝するだけではなく、それを利用して自分たちも他の者から崇拝されたがったので、自分たちの想像力〔fantasia〕の中に、女神ウェスタを祭り上げたのである。そして、もっとも博学な者たちは、パラースを祭り上げ、それを崇拝するだけではなく、それがすべての者によって崇められ、崇拝されることを望んだ。軍隊を率いる君主たちは、胸の中にマルスの神性を祭り上げて、それを賞賛し崇拝するだけではなく、すべての者がその前でひざまづくことを望んだのである。そして手短に言えば、我々もまたすべて、自分の中に残酷で横柄なライオンを持っている。それは、我々の悪意と、抑えがたい野心とを意味している。しかしそれだけではなくて、新しい神をも我々は自分の中に持っているのである。したがって、もし我々のスピリトゥスが最強のヘラクレスに変わるならば、このライオンを殺すだろう。そしてそれが殺されてしまえば、その後には慎ましさが生まれるだろう。その慎ましさの中でのみ、我々は、神に愛されるのであり、幼く、そして貧しいスピリトゥスに変わるのである。したがって、このイメージは、木星のパーシパエーのもとでは、慎ましく、恥らいをもち、善性へと、そして哲学者たちからは美德とは呼ばれないにせよ、先に我々が恥じらいについて述べたように、美德に比される諸事物へと傾く本性を意味するだろう。

しかし、メルクリウスのサンダルのもとでは、そのような善性、あるいは善なる気質の研鑽〔esercitazione〕を意味するだろう。

迷宮の中でテーセウスによって殺されたミノタウロスは、美德へと傾くという意味を与えるだろう。

しかし、それは、メルクリウスのサンダルのもとでは、人間の行為の中にある、なにがしかの美

²³ 日本語版聖書では、『詩篇』LXXXI, 9 – 10.

²⁴ キケロの典拠は特定できなかった。

徳を意味するだろう。それは、これ以外の場合には美德たりえない。なぜなら、多くの人は、それを持っていないまま、美德の定義だけを知っているだけからである。そして、これは、キケロからは活動する美德〔virtù attuosa〕と²⁴、ウェルギリウスからは燃える〔ardente〕美德と、そしてペトラルカからもそう呼ばれた²⁵。

カドゥケウス〔メルクリウスが持つ杓〕は、友愛的で、家族への思いやりと国家へと傾く本性を意味するだろう。

ダナエーは、幸運、幸福、健康、富の豊かさ、高貴さ、そして欲望の充足を意味する。

三美神は、恩恵を与え合う本性を意味する。

一頭の牡牛は、特殊な部分としては耳、およびその操作、つまり聞くこと、聞き入ること、そして唾〔sordezza〕のような苦しみ〔passione〕を持ち²⁶、通常の部分としては、射手座のためには腿を、魚座のためには足およびその諸操作を持つ。

《土星》

土星のパーシパエーのもとには、七つのイメージがある。

狼、ライオン、そして犬の三つの頭は、時間の支配下に置かれた人間を意味する²⁷。

束縛されたプロテウスは、粘り強い、不動の本性を意味する²⁸。

孤独な雀は、孤独な本性、あるいは孤独な人間、孤立した人間を意味する²⁹。

パンドラは、悪運、不幸、無知、貧しさ、非行〔infamia〕、不健康さ〔infermità〕、そして欲望をかなえることが出来ないこと〔を意味する〕³⁰。

25 ウェルギリウス『アエネーイス』VI, 130 である。Virgilio, Eneide, traduzione di Luca Canali, Introduzione di Ettore Paratore, Mondadori, Milano 1997, p.204, "Iuppiter aut ardens evexit ad aethera virtus". (邦訳は、ウェルギリウス『アエネーイス (上下)』前掲書、上巻、p.358、「ユピテルは彼ら〔オルペウス、テセウス、ヘラクレスら〕の燃え上がる美德を天まで高らかしめたのである」。なお訳文は、日本語訳とイタリア語訳を参照しつつ、率直に訳しなおしてある)。ペトラルカは、『俗語詩集』のなかで、この「燃える美德」を好んで用いてる。Francesco Petrarca, *Rerum vulgarium fragmenta*, Sonnet 19, 7; 182, 5-6; 271, 1 などを見よ (邦訳、ペトラルカ『カンツォニエーレ』池田廉訳、名古屋大学出版会、1992 年、pp.22, 297, 425.)。

26 この、牡牛を耳ないし聴覚の象徴とする解釈の典拠は、ホラポロン『ヒエログリフ集』I, 47 であろう (Orapollo, *I Geroglifici*, introduzione, traduzione e note di Mario Andrea Rigoni e Elena Zanco, test greco a fronte, Rizzoli, Milano 1996, p.134, 「聞くことを示すため、〔エジプト人たちは〕一頭の牡牛の耳の形を描く。事実、牡牛が子どもを宿すことを望むとき (それは三時間以上は発情し続けないのである)、この上なく大きな声で吼え、もしこの時間のあいだに牡牛がそのもとへとたどり着かなければ、牡牛は次回のお会いまで陰門を閉ざすのである。このことは、しかしながら、めったに起こらない。実際には、牡牛は、とても遠いところからでもそれを聞きつけ、牡牛が発情していることを知り、性交するために駆けつけるのであり、このようなことをするのは動物たちの中でも牛だけである」。

27 「洞窟」での記述を参照せよ。足達「カミッロ (4)」, p. 7.

28 「洞窟」での記述を参照せよ。足達「カミッロ (4)」, pp. 8-10.

29 「洞窟」での記述を参照せよ。足達「カミッロ (4)」, p.11.

30 「洞窟」での記述を参照せよ。足達「カミッロ (4)」, p.11.

31 同上。

髪を切られた一人の娘は、人間の脆弱さ、疲労、そして嘘を含意するだろう³¹。

山の上で眠り、ディアナに接吻されるエンデュミオン³²。カバラ主義者たちの言葉の中に、接

32 ディアナ（アルテミス）とエンデュミオンの物語は、ディアナ本来の処女神としての属性とは対照的であり、ディアナと月の女神との同一視が定着して以後、比較的新しく草案された神話であると考えられる。たとえば、アポロニオス（Apollonius Rhodius, *Argonautica*, IV, 55 – 57）は、「折りしも地の果てから昇るティターン族の娘、月の女神は狂ったようにさまよう乙女を見て意地悪く勝ち誇り、胸の中でこう言った。〈おやまあ、わたしだけがラトモスの洞窟にさ迷って行くのでもないし、わたしだけが美しいエンデュミオンのせいで燃え上がるのでもなかったのだ！〉」（アポロニオス『アルゴナウティカ』岡道男訳、講談社文芸文庫、1997年、p.252）。アポロドーロス（Apollodoros, *Bibliothēke*, I, VII, 5）は、こう記している。「カリュケーとアエトリオスから一子エンデュミオンが生まれた。彼はテッサリアーからアイオリス人を率いてエーリスを創建した。一説によれば彼はゼウスの子であるという。彼は人に優れて美貌であったが、月の神が彼に恋をした。しかしゼウスが彼にその欲する所を授け、彼は不老不死となって永久に眠ることを選んだのである」（アポロドーロス『ギリシア神話』高津春繁訳、岩波文庫、1973, pp.43 – 44）。

エンデュミオンは天文学者の隠喩としても用いられた。この「天文学者エンデュミオン」の神話は、ルキアノスにさかのぼることができるが、彼は必ずしもそれを全面的に主張してはいない。ルキアノスは、『神々の対話』の「アプロディーテとセレーネーの対話」のなかでは、月とエンデュミオンの関係を、「愛の過ち」という寓意によって説明している。「アプロディーテ：私が聞くこの音は、あなたのものなのですか？ 月の貴婦人よ。人々は語ります、あなたがカリヤ〔小アジア南西部の都市国家〕の上に登るときはいつでも、あなたはあなたの馬車を停めて、狩人のいでたちのまま扉の外で眠っているエンデュミオンを見つめ、時々あなたの道をそれて、彼のもとまで降りていったのだ、と。セレーネー：あなたの息子〔クビドないしエロス〕に尋ねなさい、アプロディーテよ。それは彼の過ちなのです。アプロディーテ：それは分かっております。彼ときたら、まったく厚かましいったらありません」（Luciano, *Dialoghi deorum*, Dialogue 19 (11), in *Lucian with an English Translation by M. D. Macleod, in Eight Volumes*, vol.VII, The Loeb Classical Library, London-Cambridge (Mass.) 1961, p.329）。

しかしルキアノスは、他の著作のなかでは、しばしば月を発見した天体観測者としてのエンデュミオンについて言及している。たとえば、『天文学』（17節）では、「この科学を幾つかの部分に区分することによって、異なる発見を行った人たちがいます。ある人は月の詳細な細部を集め、ある人たちは木星の、そしてある人は太陽のそれを集め、それらの軌道や動き、力を研究しました。だからエンデュミオンは月の動きを確定したのです…〔後略〕…」（Lucian, *Astrology*, 17, in *Lucian with an English Translation by A. M. Harmon, in Eight Volumes*, vol.V, The Loeb Classical Library 302, London-Cambridge (Mass.), 1972, p.360）。ルキアノスは、この直前の16節では、パーシパエーについても、彼女がダイダロスから天文学を学んでいたという、よく似た現実主義的神話解釈を記している。前註7を参照のこと。

エンデュミオンと月の逸話を主題とする視覚的作例のなかでも、とくに優れ、かつ図像的にも興味深い例の一つが、グエルチーノの絵《エンデュミオン》（1644年ないし47年、キャンバスに油彩、125 × 105cm、ローマ、ドーリア・パンフィーリ美術館）である。美術史家クライディア・チエーリ・ヴィアによれば、この絵は、ジャンバッティスタ・マリーノによって「新しいエンデュミオン」と歌われたガリレオ・ガリレイの見立てとして制作された可能性があるという。このことについては、以下を見よ。Claudia Cieri Via (a cura di), *Immagini degli dei. Mitologia e collezionismo tra '500 e '600* (Lecce, Fondazione Memmo, 7 dicembre 1996 – 31 marzo 1997), Leonardo Arte, Venezia 1996, Cat.26, pp.162 – 4.

33 「接吻による死」ないし「暗い死」の奥義は、ルネサンス人文主義の「普遍の哲学 perenne filosofia」の思考パターンによく適合し、流布したようである。この奥義と美術の関係について指摘した先駆者はエドガー・ヴィントである。Edgar Wind, *Pagan Mysteries in the Renaissance. An Exploration of Philosophical and Mystical Sources of Iconography in Renaissance Art*, Revised and Enlarged Edition, New York and London 1968 (1958), pp.152 – 70（邦訳は、エドガー・ヴィント『ルネサンスの異教秘儀』（田中、藤田、加藤訳）、晶文社、1995（1986）年、pp.130 – 41）。さらに、Francesco Gandolfo, *Il “Dolce tempo”. Mistica, ermetismo e*

sogno nel Cinquecento, Roma 1978, pp.54 – 6 も参照のこと。

カミッロが参照することが出来た重要な典拠を確認しよう。ジョヴァンニ・ピコ・デッラ・ミランドラは、『九百の論題』のなかの、「ゾロアスターとカルデア人たちによるその釈義の意味についての自分自身の見解にもとづく十五の論題」第七番で、こう記している。Giovanni Pico della Mirandola, *Conclusiones nongentae. Le novecento Tesi dell'anno 1486*, a cura di Albano Biondi, Olschki, Firenze, 1995, p.114, Conclusiones numero XV secundum propriam opinionem de intelligentia dictorum Zoroastris et expositorum eius Chaldaeorum, "7. Quae dicunt interpretes super XIV aphorismo, perfecte intelligentur per ea, que dicunt Cabalistae de morte osculi."（「釈義者たちが14番目のアフォリズムについて述べていることは、カバラ主義者たちが〈暗い死〉について述べていることにそれを結びつけることによって完全に理解される」）

さらに、ジョヴァンニ・ピコは、ジョヴァンニ・ペーニヴィエーニの詩への註釈の中で、この教説について詳しく論じている（*Wind, Pagan Mysteries...*, cit., p.155, note 7. 邦訳は、ウィント『ルネサンスの異教秘儀』前掲書、p.342、註7）。

ヴェネツィアのユダヤ神秘主義者にして新プラトン主義者、レオーネ・エブレオ（ないしユダ・アバルバネル）も、著作『愛についての対話』（印刷出版は1535年）の中でこの教説を論じている。レオーネは、エンデュミオンとディアナの神話それ自体については言及していないが、第三対話の途上で、この教説に触れている。レオーネ自身の代弁者である哲学者フィロンが歩いているところを見かけたその弟子の女性、ソフィアは、彼に声をかけるが、彼はまったくそれに反応しない。怪しんだソフィアが彼に真相を問いただしたところ、彼は、自分は眼を開けたまま、塞がってもいない耳を持ちながら、なお外界と絶縁して思考のなかに沈潜していたのだと説明した（なお、フィロンとソフィアは「哲学」からそれぞれ切り出された名前であることはいまでもなからう）。そして、そのような瞑想の意味について説明する途上で、フィロンはこう述べる。「靈魂が肉体から完全に解放され、精気〔スピリトゥス〕が強く緊密な結合から離れてしまうほどに、欲求が強烈で観照が徹底していることはありえます。そうなると靈魂は欲求し観照する対象に親しく付着し、即座にまったく生気のなくなった肉体を捨て去ることができるのです」。ソフィアが「そうした死は甘美なものでしょうね」と応じると、哲学者はこう結論付ける。Leone Ebreo (Giuda Abarbanel), *Dialoghi d'amore*, a cura di Santino Caramella, Bari 1929, Dialogo Terzo, p.178, "Tale è stata la morte de' nostri beati, che, contemplando con sommo desiderio la bellezza divina, convertendo tutta l'anima in quella, abbando (sic) norno il corpo; onde la sacra Scrittura, parlando della morte de' qui santi pastori Moisè e Aron, disse che morirono per bocca di Dio, e li sapienti metaforicamente dichiarano che morir (sic) no baciando la divinità, cioè rapiti da l'amorosa contemplazione e unione divina, secondo hai inteso."（「これが私たちの至福者たちの死だったのです。つまり大いなる欲求でもって神の美を観照し、靈魂すべてを神の美と化して肉体を捨て去ったわけです。かくて聖書は聖なる牧者モーセとアロンについて話す際に、彼らが神の口を通して死んだと述べています。賢者たちは彼らが神に接吻して死んだと比喩的に表現しましたが、あなたも聞いているとおり、情愛に満ちた観照と神との合一によって命を奪い去られてしまったのです」（レオーネ・エブレオ『愛の対話』木田誠二訳、平凡社、1993年、第三の対話、pp.205 – 6）。また、レオーネ・エブレオの思想が画家ジョルジョーネに与えたかもしれない影響について考察したマウリツィオ・カルヴェージによれば、レオーネは1508年から1510年にかけて草稿を完成させていたと考えられるという（Maurizio Calvesi, "La 'morte di Bacio'. Saggio sull'ermetismo di Giorgione", in *Storia dell'arte*, II, 1970, fasc. 7 – 8, pp.180 – 233）。

16世紀前半のベストセラーのひとつであるバルダッサーレ・カスティリオーネ『宮廷人』（1525年）の第四書では、対話者のひとりであるビエトロ・ベンボが、新プラトン主義の影響を如実に感じさせる口調で、このように語っている。カスティリオーネ『宮廷人』清水純一、岩倉具忠、天野恵訳註、東海大学出版会、1987年、第四の書、pp.748 – 751（原文あり）、「……〔前略〕……接吻は肉体と靈魂との結合ですから、官能的恋人が靈魂の部分よりも肉体の部分であることを知ってはいても、唇によって靈魂の通訳者である言葉に出口が与えられ、それもまた靈魂と呼ばれうる、あの内なる喘ぎの通路となっていることも知っているからです。それゆえ、接吻によって愛する女性の唇に唇を接合して喜ぶのです。それは不正な欲望へ近づくためではなくて、この接合が靈魂への通路を開くことを感じるためです。この欲望に導かれて二人はお互いに自分を相手の肉体の中に沈め、こうして互いに一体となって融合しあうと感ずるのです。このとき二人は互いに二つの靈魂を持ち、こうして二つの靈魂から合成された、ただ一つの靈魂が、いわば、二つの肉体を支配することになります。したがって接吻と

は、端的に言えば、肉体の結合というよりむしろ靈魂の結合というべきです。というのは、この一体化の中で、相手の靈魂を肉体から引き離すほどの力をもつからです。そのためにすべての純潔な恋人たちは靈魂の結合として接吻を欲するのです。それゆえ、神聖な恋をしたプラトンは、靈魂は接吻することによって肉体から離れ出るべく唇にやってくる、と言っています。かくして、靈魂が感覚的な事物から離れ、全面的に知的なものと合一することが、接吻によって表されることになります。ソロモンは、雅歌の書で言っています。〈唇のくちづけをもって我にくちづけよ〉と、その表さんとするところは、美と親しく内的に結合することによって肉体を放棄するように、聖なる愛によって天上の美の瞑想へと魂を奪われたい、ということです」。

フェッラーラ宮廷で活躍した博学な人文主義者、チェリオ・カルカニーニ (Celio Calcagnini) は、ある「演説」(1544年に出版された『作品集 *Opera aliquot*』に含まれている)のなかで、こう記している。Caelii Calcagnini Ferrariensis, Protonotarii Apostolici, *Opera aliquot*. Ad illustrissimum & Excellentiss. Principem D. Herculem Secundum, ducem Ferrariae quartum. Catalogum operum post praefationem inuenies, & in calce Elenchum. Indicanda enim erant retrusiora quaedam ex utriusque linguae thesauris, quae passim inferciuntur, & ad ueterum scripta intelligenda pernecessaria sunt. Basileae MDXLIII. Cum Imp. Maiestatis autoritate & priuilegio, p.552, Pro promotore doctore oratio Caeli Calcagnini in collegio habita, "Nam & in arcanis Hebraeorum legitur, Abraham, Aaron, Enoch, & Heliam atque alios qui ad caelestium rerum contemplationem ita rapti sunt, ut in se mortui, estra se uiuerunt, non alia morte quàm brasic (sic) ae, id est osculi deperij (sic) sse. Ob id clamat Solomon in principio Canticorum, Osculetur me osculo oris sui." (「なぜなら、ヘブライ人たちの秘儀のなかで読むことが出来るように、アブラハム、アロン、エノク、エリヤ、そしてその他の人たちは、瞑想することによって、あたかも彼ら自身のなかで死んだように、もし生きているとしてもその中にはいないかのようにして、天の領域へと運びあげられたからである。これは、[神の]抱擁による死、すなわち暗く消滅することである。このことについて、ソロモンは最初の雅歌 [I, 1-2] のなかで、こう歌っている。〈どうかあの方が、その口のくちづけをもって、私にくちづけしてくださるように〉」)

フランチェスコ・ジョルジョ・ヴェネトの『自作詩およびそれへの註釈』でも、『エノク書』および『コリントの信徒への手紙一』(XV, 40)、『雅歌』(I, 1-2)を引用しながら、この奥義が論じられている。Francesco Giorgio Veneto, *L'Elegante Poema & Commento sopra il Poema*, Édition critique par Jean-François Maillard, Préface de Jean Mesnard, Milano 1991, Francesco Giorgio, Commento al poema del Rev. Padre Fra Francesco Giorgio, Canto XIV, p.149, "Concludo dunque che quello che farà universalmente il fuoco nel tempo della resurrettione, fanno alcuni in vita corporale per forza d'amore, ma non però senza morte, della quale dice Paolo alli Colocensi al 3°, Seti morti, ma la vostra vita e ascondita con Christo. La qual morte, nostri chiaman ratto, o eccesso di mente, Greci binsicha, et Hebrei la morte del baso. La quale desiderava Salomone per intendere le cose divine, quando ei disse, Basiato io sia conil bascio della sua bocca." (「したがって、私はこう結論する。すなわち、[キリストの]復活の時には世界中に火が生じるだろう。そして、ある者たちは愛の力を通じて[キリストの]身体の生命のなかに取り込まれるが、そこでは死がともなわないわけではないのである。これについて、パウロは、コロサイ人たちにあてた手紙の第三節で、〈あなたたちは死んだのであり、あなたたちの命はキリストとともに神の内側に隠されているのです〉と述べている。この死を、我々は知性の略奪[ratto]、あるいは遊離と、ギリシャ人たちはビネシカ[bi-neshikah]と、そしてヘブライ人たちは接吻による死と呼ぶ。ソロモンは、〈どうかあの方が、その口のくちづけをもって、私にくちづけしてくださるように〉と語るとき、神聖な事物を理解するためにそれを望んだのである」)

ビエリオ・ヴァレリアーノの『ヒエログリフ集』にクリオーネが加えた補遺では、こう記されている。Ieroglifici, ouero Commentari delle occulte significationi de gli Egittij, & d'altre Nationi, composti per l'eccellente Signor Pierio Valeriano da Bolzano di Bellune. Accresciuti di due Libri dal Sig. Celio Augusto (sic) ino Curione. Et hora da varij, & eccellenti Letterati in questa nostra lingua tradotti; & da noi con bellissime Figure illustrati: Opera degna, & vtilissima ad ogni sorte di persone virtuose. Con due Indici, vno de nomi de gli Authori, & l'altro delle cose trattate, & notabili in questi sessanta libri. In Venetia, Appresso Gio. Antonio, e Giacomo de' Franceschi, MDCII, Di Celio Augusto Curione, De i Trattati de Gieroglifici, all'Eccellentissimo Dottor di Legge, M. Basilio Amerbacchio, libro primo, pp.897 - 8, "ENDIMIONE. LA MORTE D'HVOMINI SANTI. Ritrouandosi molte sorti di morti, quella è massimamente e da i sauij de

Gentili, & per testimonio delle sacre lettere approuata, & lodata, quando quelli che santamente son uissuti muoiono. Ma quelli che son morti di quell'altra sorte di morte, della quale parlammo nella figura d'Hercole che uccide Antheo, cioè hauendo uinte, & superate le prauie cupidità, & i disordinati affetti, & anhelando di andarsene a godere Dio, e con lui congiugn (*sic*) ersi desiderando, (il che mentre che in questo carcere corporeo siamo rinchiusi auuenir non ci puo) da lui sono uerso il cielo con il corpo leuati, e rapiti, non altrimenti morti, che se da un'alto sonno fussero addormentati; si come desideraua morire S. Paolo, quando diceua: Io desidero che questa anima si sciogla dal corpo per esser con Christo. Et questa sorte di morte, i Theologi mistici, e simbolici, la dissero un bacio, del quale pare che parlasse Salomone nel suo Cantico, quando dice: Bacimi con il bacio della sua bocca. Ilche (*sic*) fu adombrato, e figurato sotto l'immagine d'Endimione, ilquale in un profondissimo sonno essendo sepolto, fu da Diana baciato, imperoche dicono, che Diana, come quella che la virtu delle stelle che ella riceua, infonde, & influisce a queste cose inferiori, e la Regina, e la Signora delle celesti proporzioni, o aspetti, & delle intelligenze. Et che Endimione significa l'anima d'un'huomo santo, del cui amore presi, i celesti spiriti, accioche quella possano a loro congiungere & baciare, essendo ella sopra un'alto monte, cioè mentre che i suoi pensieri, & la sua mente inalza uerso il cielo, in un profondo sonno è sepolta, cioè nella morte di questo corpo. Imperoche essendo il corpo uno impedimento, per il quale a Dio congiugn (*sic*) er non ci pot (*sic*) iamo, di quì segue, che quando da quello siamo sciolti, liberi al cielo ce ne uol (*sic*) iamo. Ilche quando più presto ci auuiene, tanto maggior grazie a Dio render deuemo, nè però deuemo ricusare, di sopportare uolontieri questo carcere del corpo, quanto tempo a lui piaccia, ma deuemo continuamente pregarlo, il quale solo tutti i beni ci dona, che in tanto almeno le nostre cupidità uccidi; lequali dal suo congiugn (*sic*) imento rimuouere ci possono, & i suoi soauì abbracciamenti impedirci, ilche accioche far gli piaccia con le mani alzate al cielo, suppliche uolmente la sua infinita clemenza prego." (「エンデュミオン。聖人の死。たくさんの種類の死が見出されるが、異教徒の賢者たちからも、そして聖書の証言によっても、聖なるものとして生きた人々が死んだ時のそれが、最大限に認められ、また賞賛された。しかし、我々がそれについてアンタイオスを殺すヘラクレスの姿のなかで語った、このもう一つの死を死んだ人たちは、すなわち、墮落した愛欲と制御を失った愛情に打ち勝ち、神を享受するために出発し、彼と結合を遂げようとして望んで（しかしそれは、この身体という牢獄の中に我々が閉じ込められているうちは起こりえない）あえぎ苦しみながら、彼によって身体とともに天へと引き上げられ、略奪されるのであり、まさしく、高い場所にある眠りによって眠らされて死ぬのである。聖パウロは、*「私はこの靈魂が身体から解き放たれて、キリストとともにいることを望みます」*〔これは『フィリピの信徒への手紙』I, 23の意識であり、ウルガータ版の原文は、*"Cupio dissolui, et esse cum Christo"* である〕と言った際に、そのように死ぬことを望んだのである。そして、神秘的かつ象徴的な神学者たちは、この種の死は接吻であると言った。ソロモンは、彼の『雅歌』のなかで、次のように言うとき、これについて語っているように見える。〈どうかあの方が、その口のくちづけをもって、私にくちづけしてくださいに〉。それは、エンデュミオンのイメージのもとに隠され、形作られる。彼は、この上なく深い眠りのなかに沈潜し、ディアナによって接吻されたが、彼ら〔神秘的かつ象徴的な神学者たち〕が言うには、なぜならば、ディアナは、星々の美德を受け取ると同時に、これらより低いところにある事物へとそれを注入し、それに影響するのであり、天界の比例ないし諸側面、そしてその知性を司る女王だからである。そして、彼らが言うには、エンデュミオンは、聖人の靈魂を意味する。その靈魂を、天のスピリトゥスたちは愛で包み、それによって、それらは聖人の靈魂と結合し、それに接吻することができるのである。〔エンデュミオンの〕靈魂が高い山の上にあったということは、すなわち、彼の思考と彼の心が天に向かって上昇しながら、他方では深い眠りに沈潜していた、つまりこの身体の死の中にあった、ということである。なぜならば、身体は一つの障害物であり、それがあるからこそ、我々は神に結合することができないのであり、それに続けて、我々はそれから我々が解き放たれ、自由に天に向かうことを望むのである。これが生じたならばすくさま、我々は神に最大限の感謝を捧げなければならないが、なお、彼に好ましいと思われるまでのあいだは、この身体という牢獄に耐えることを拒否してはならず、不断に神に祈らなければならない。神のみが、あらゆる善なる物を我々に与えてくれるのであり、いずれ我々の愛欲を殺すのである。我々の愛欲は、彼との結合から我々を遠ざけ、彼の妙なる抱擁を邪魔するのである。そのため、天に向けて手を差し伸べることは彼にとって好ましいのであり、私は彼の無限の聡明さを切に祈るのである」)

吻による死〔la morte del bascio〕なくしては³³、我々は天界とも神とも、真の結合を遂げること

さらに、エドガー・ヴィントによれば、ジョヴァンニ・ピコのカバラ主義者の側面の後継者とも呼ばれるべきエジディオ・ダ・ヴィテルボも、この「接吻による死」の奥義について述べている。Wind, *Pagan Mysteries in the Renaissance*...cit., p.155, note 11. 邦訳は、ヴィント『ルネサンスの異教秘儀』前掲書、p.133。

ジョルダノ・ブルーノは、『英雄的狂気 *Eroici furori*』（パリ、1585年）のなかで（第二部第一対話第七節）、「二つの燃える眼」によって「生と死」を意味するエンブレムを説明する際、「カバラ主義者たちによって暗い死〔mors osculi〕と呼ばれる死」を引き合いに出している。Giordano Bruno, *Eroici furori*, Introduzione di Michele Ciliberto, Testo e note a cura di Simonetta Bassi, Laterza, Roma-Bari 1995, Parte seconda, Dialogo Primo, VII, p.108.

34「接吻による死」ないし「暗い死」のカバラの教説と至近距離で共鳴しうる別の幾つかの図像、思想、あるいは文学作品について見ておこう。なぜなら、それらは、ルネサンスの人文主義的文化のなかで、密接に絡み合い、互いに融和しながら流布して行ったと考えられるからである。

その一つとして、「創造的天才の源泉としての憂鬱質」の思想が挙げられるだろう。パノフスキーたちの基本研究が明らかにしたように、ルネサンスにおける憂鬱質の称揚およびその視覚的表現は、古代以来、伝統的に憂鬱質の特徴と見なされてきた「怠惰で無気力ゆえの頰杖をついた眠り」や「死を瞑想する性格」を、肯定的なものとして捉えなおそうと腐心したのである。このことについては、レイモンド・クリバンスキー、アーウィン・パノフスキー、フリッツ・ザクスル『土星とメランコリー：自然哲学、宗教、芸術の歴史における研究』田中英道監訳、榎本武文、尾崎彰宏、加藤雅之訳、晶文社、1991年を全般的に参照のこと。

第二に、パウサニアスにまでさかのぼることができる「双子としての眠り（ヒュプノス）と死（タナトス）」の神話および図像が挙げられるだろう。パウサニアスは、その『ギリシャの記述』第五書、十八節のなかで、エリスのヘーラー（ユーノー）の神殿に置かれていた次のような立像について書いている。「右腕で眠っている白い子どもを抱き、左手では眠っている子どもと似ているが黒い子どもを抱いている一人の女性の像がある。どちらの子どもも、足を別の方向に向けている。銘文は次のように説明しているが、銘文なしでもすぐに洞察されるように、これらの像は〈死〉と〈眠り〉であり、彼らの乳母である〈夜〉である」（Pausanias, *Description of Greece with an English Translation by W. H. S. Jones and H. A. Ormerod*, Vol.II, The Loeb Classical Library, London-Cambridge (Mass.) 1960, Book V, XVIII, pp.482 – 484.）。

ホメロスもまた、『イーリアス』のなかで、これら眠りと死の双子について、しばしば言及している。「〔女神ヘーラーは〕ここで〈死〉の兄弟〈眠り〉に会うと…〔後略〕…」、第十四歌、231行；「彼〔ゼウスの息子サルペドン〕が息絶えことされた時には、〈死〉の神と安らかな〈眠り〉の神に命じて、遺体を広いリュキエの国まで運ばせておやりになれば…〔後略〕…」、第十六歌、454行；「〈眠り〉と〈死〉の双子の神…〔後略〕…」、672行（ホメロス『イーリアス（上下）』松平千秋訳、岩波文庫、1992年、下巻、pp.61, 134 – 5, 144を参照しながら、文章を若干改変した）。さらに、ヘシオドスも『神統記』のなかで、次のように歌っている。「さて、夜^{ニクテ}は忌まわしい定業と死の運命と死を生み、また、眠り、夢の族を生み…〔後略〕…」（211 – 212行）；「またそこには、暗い夜^{ニクテ}の子どもたちが居を構えている。すなわち眠りと死で、恐るべき神々である」（758 – 759行）（ヘシオドス『神統記』廣川洋一訳、岩波文庫、1984年、pp.32, 96に少し手を加えた）。さらに、『オルフェウス賛歌』85, 8にも同様の記述を見出すことができる。これらの典拠に加えて、オウィディウスは、『様々な恋愛〔Amores〕』第二書、第九歌で、死と眠りのイメージの対応について歌っている。Ovidius, *Amores*, Book II, IX, 41 – 42, in *Ovid with an English Translation, Heroides and Amores by Grant Showerman*, The Loeb Classical Library, London-Cambridge (Mass.) 1963, p.410, "Stulte, quid est somnus, gelidae nisi mortis imago / longa quiescendi tempora fata debunt."（「くだらない！ 冷たい死のイメージ以外に、眠りなどありえない／休息ならば、運命がそれを長い時間与えてくれるだろう」）。

眠りと死の双子のイメージは、ボッカッチョ、ジラルディ、ナターレ・コンティ、さらにヴィンチェンツォ・カルターリといったルネサンスの人文主義者、あるいは神話解釈学者たちによっても論じられており、枚挙の暇がないほどである。それらについては、別の機会に論じることになろう。

第三に、フランチェスコ・コロナの小説『ポリフィロの夢の中での愛の闘い〔*Hypnerotomachia Poliphili*〕』（ヴェネツィア、1499年）が挙げられるだろう。このテキストの内容、成立背景、さらに著者の正

が出来ないということを読むことが出来る³⁴。私がこう述べる理由は、なぜならば、我々が先に語ったアンタイオスの死³⁵もまたその中に含まれる数多くの死の一つとして、この接吻によるそれがあるからである。これについて、ソロモンが、雅歌の冒頭で、このように言及している。「どうかあの方が、その口づけをもって私に口づけしてください」³⁶。この意味は、次のように述べる際のパウロによって、別の言葉を用いて、もっと明らかに語られている。「この世を去ってキリストと共にいたいと熱望しています」³⁷。この望みは、パウロの場合とは異なり、ソロモンによっては、言葉の意味の上では表明されていないが、それが望まれたことが暗示的に示されているのである。そして、ペトラルカは、次のように述べたとき、謎めかしながら³⁸、このことを論じている。

ああ、その日よ幸いなれ、
この地上の牢獄から抜け出して
この私の重く、脆く、死すべき衣装〔gonna〕を壊し、消滅させる日よ、
そして、かくも長き暗闇から旅立ち、
美しき天へと飛んで行き
そこで私が我が主と我が^{マドンナ}女を見る、その日よ³⁹。

体にかんする論争については、以下を参照せよ。

Francesco Colonna, *Hypnerotomachia Poliphili*, Edizione critica e commento a cura di Giovanni Pozzi e Lucia A. Ciapponi, 2 vol., Editrice Antenore, Padova, 1980; Maurizio Calvesi, *Il sogno di Polifilo prenestino*, Officina Edizione, Roma 1983; Maurizio Calvesi, *La «Pugna d'amore in sogno» di Francesco Colonna Romano*, Lithos editrice, Roma 1996; Stefano Borsi, *Polifilo Architetto. Cultura architettonica e teoria artistica nell'Hypnerotomachia Poliphili di Francesco Colonna, 1499*, Officina Edizioni, Roma 1995; Liane Lefavre, *Leon Battista Alberti's Hypnerotomachia Poliphili. Re-cognizing the Architectural Body in the Early Italian Renaissance*, The MIT Press, Cambridge (Mass.) – London 1997.

35 ゴルゴーンの階層の土星の扉に含まれる「アンタイオスを胸の上に持ち上げるヘラクレスのイメージ」のことである。

36『雅歌』I, 1.

37『フィリピの信徒への手紙』I, 23.

38「謎めかしながら」と訳した箇所は、原文では "nell'indeclinabile" とつづられていた。ボルゾーニの版本も、Edizione RESの版本も、いずれもとくに註釈を加えていないが、そのままでは意味が通らない。原文どおりに訳せば「不可避免的」といった意味になってしまうだろう。ウェンネカーも、原文から訳して "in the indeclinable" としているが、註釈を加えて、「綴りの誤りは意図的なものではないだろう」と述べている。私もまたウェンネカーの意見に賛成だが、そのまま訳すことには抵抗を感じる。実際、これまで我々が読みすすめてきた『劇場のアイデア』のテキストから、カミッロのもともとの意図を推し量ることは十分に可能なのである。この「接吻による死」についての説明の場合は、その論旨を考慮するならば、カミッロは、口述した際には、"nell'indecifrabile" ないし "indecifrabilmente" と述べていたと推測することができるだろう。

39 Francesco Petrarca, *Rerum vulgarium fragmenta*, Sonetto 349, 9 – 14, "O felice quel di che dal terreno / carcere uscendo, lasci rotta et sparta / questa mia grave et frale et mortal gonna, / et da sì lunghe tenebre mi parta, / volando tanto in su nel bel sereno, / ch'io vegga il mio Signore et la mia donna." (ペトラルカ『俗語詩集』349番(ソネット)、9 – 14行) (邦訳は、ペトラルカ『カンツォニエーレ』池田廉訳、名古屋大学出版会、1992年、

このように、身体は、天界の諸事物が、互いに寄り添いあうことによって我々の靈魂にもたらそうと望む真の結合から、そして接吻から、我々を分離させるものであるため、その消滅を通じてその接吻にたどりつくことが可能となるのである。それを象徴神学者たちは解明しようと望み、彼らの寓話のなかに次のような話を残したのである。すなわち、彼らが作り出したディアナ（彼女は超天界のあらゆる尺度が住まう王国を掌中におさめているため、そしてあらゆる高いところから来る諸影響は彼女を通過するため、彼女はあらゆる高位の諸事物の代理物であり、そしてまた、それらの見立て〔lungotenente〕なのである）、つまり、エンデュミオンに恋したこの女は、すなわち我々の靈魂に恋をしたのだ、と私は言いたいのである。我々の魂は、彼に接吻することができるようになることを望む彼女によって、上のほうで待たれているのである⁴⁰。彼女は、逃げようとする我々の魂を、ある山の頂で永遠の眠りを眠るようにさせ、彼を眠らせることによって、彼女の望みを満足させるために彼に接吻することができるのである。この永遠の眠りは死を意味するので、このイメージは、死すべき存在、死、そしてそれに属するすべての輪を含むだろう⁴¹。

一頭の牡牛。これは、特殊な部分としては、白髪と皺^{しわ}を有するだろう。そして、通常の部分としては、山羊座のためには膝を、みずがめ座のためには足を持つだろう。

p.523。なお、ここでの訳は、それを参照しつつ、より率直に訳しなおしたものである）。

40 欄外註：「エンデュミオンとその寓話〔Endimione, et sua favola〕」。

41 「輪」については、上註 10 を参照せよ。